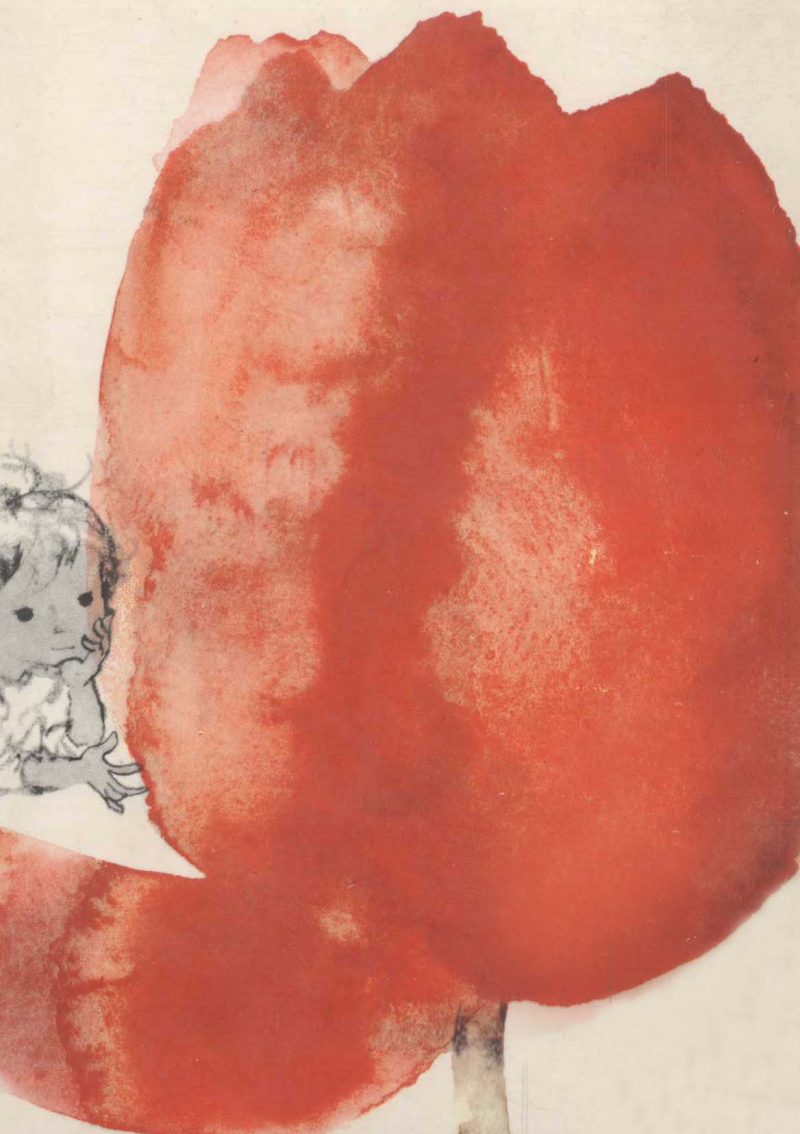


現代日本の児童文学

神宮輝夫 著



神宮輝夫 著

家庭文庫11 現代日本の児童文学

著 者 神宮輝夫

発行者 竹下みな

発行所 株式
会社 評論社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話 東京 (03) 265-1961 振替 東京7294

(A-1)

敗戦から五〇年代へ……………7

一、『太陽よりも月よりも』ほか——楽天的・攻撃的な作品群 7

二、守勢の文学へ——政治状勢への追従 17

三、『二十四の瞳』、『ノンちゃん雲にのる』——生きた子ども像 24

四、『風信器』、『チャコベエ』、『原始林あらし』——新文学への模索 35

六〇年代を考える……………45

一、『赤とんぼの空』と『赤毛のポチ』、『とべたら本こ』——子どもへのアプローチ 47

二、『とべたら本こ』から『ドブネズミ色の街』まで——その前衛性 55

三、『ぬすまれた町』と『ドブネズミ色の街』 62

四、回顧的な転回 71

五、フィクションの一つの条件 81

六、上意下達の文学 84

七〇年代の動き…………… 87

△幼年文学の現在▽ 87

一、幼年、小学校低・中学年向きの空想的な物語の現在 87

二、では、何が必要なのか 101

三、空想の質はどう変わったか 109

四、ふしぎさと奥行き 117

△高学年生向きの作品の現在▽ 122

一、せまく、ひたむきな作品群 122

二、理屈のつくおもしろさ 131

三、創造的な作品を	137
-----------	-----

戦後児童文学への一考察……………142

一、現在の児童像	142
----------	-----

二、物質主義的傾向	146
-----------	-----

三、楽天主義の終末	152
-----------	-----

四、子どもの回復	156
----------	-----

五、人間の追究	161
---------	-----

六、新しい研究の課題	164
------------	-----

あとがき……………	167
-----------	-----

現代日本の児童文学

敗戦から五〇年代へ

一、『太陽よりも月よりも』ほか——楽天的・攻撃的な作品群

敗戦直後、児童文学は、一時期、せきを切ったように巷にあふれ出た。それは、作家の側からいえば、出版社が原稿料を持って作品を買いにくるほどの勢いであった。そして、それが朝鮮戦争を境にまたたくまにつぶれ、その後、長い停滞がつづくことは、周知の事実である。そして、ごく短かった隆盛期の作品群は、現在ほとんど問題にされていない。

だが、私たちが、現在の児童文学を正しく理解するためには、そろそろ、戦後を克明に研究する必要があると思う。もちろん、現在までに、概括的な意見はいくつかあった。かんとんに列記しよう。

菅忠道は『日本の児童文学』で、戦後の三年間ほどを、「赤い鳥」伝統と、昭和初年のプロレタリア児童文学、それにつながる生活童話の伝統が主流となり、また児童ジャーナリズムを圧倒したと規定している。

上笙一郎は「これらの無国籍童話は、『民主主義的な児童文学を創造』しようとする児童文学者の熱意を反映して、そのテーマはアクチュアリティに富み、日本を民主主義的な社会に改革して行こうという思想にあふれていた。けれどもこれらは、第二次世界大戦中まで児童文学者として自己形成を終えた作家たちによって書かれており、しかもその方法論は、かつての生活童話を踏襲したものでしかなかったのである。そのため無国籍童話と生活童話は、すぐれてリアリスティックな生活の場に置かれていた当時の子どもたちの心を、全面的につかむことができなかった。」（『児童文学概論』東京堂出版、二〇五～六ページ）

と批判している。

古田足日は、この時期についての発言は一つにかぎらないと思うが、もっとも端的な発言として、昭和三八年に至文堂から出た『現代児童文学事典』から引用すると、彼は、「筒井敬介の『コルプス先生汽車へのる』、岡本良雄の『あすもおかしいか』、平塚武二の『ウイザード博士』、関英雄の『銅像になった犬』など、いま読んでもそれぞれ当時の熱っぽさがつたわってくる。この熱っぽさということを、たいせつなことでぼくは思いたい。当時の民主主義文学の花ざかりをささえたのは、熱っぽさであった。熱っぽさといって悪ければ、精神の高揚であった。(中略)精神の高揚がこの時期の作品を力のあるものにしたことと、それが同時に作品を弱くしたことを、ぼくたちはみとめなければなるまい。」と述べている。

そして、私自身は、「この時期の専門的児童文学者たちは性急にすぎた。解放された彼らは、新しい出発に際して、子どもの文学とはどんなものかを考え、子どもの心の成長になうものは何かを考えなかった。」(『児童文学概論』牧書店、一九六二)と考えていた。

以上の分析は、拙論をのぞいて、民主主義思想の伝達とその熱意を評価しながら、文学としての失敗を批判する共通性をもっている。だが、私は、（昭和三八年の時点で、この時期の作品群をもっとも買わなかった人間として）このごく短い期間を、よりくわしく見る必要があると考えている。

質的に見て、この時期の作品には、きわだった二、三の特質がある。その一つは、創作態度に「次代への期待」がほとんどない点である。そして、そのもっともあきらかな例が平塚武二であろう。彼は、昭和二三年に『ウイザード博士』を発表している。有名な魔法使いウイザード博士が、ジャッコンだかニッパンだかいう国に來朝し、王さまにお目にかかり、いっしょに牛乳をのむ。牛乳の湯気にくもった王さまのめがねを、ウイザード博士がハンカチでふいてやると、なにもかもまっかに見える。そして、博士が帰ると、ふたたび万事がふつうの色にもどるのである。

当然、ここには天皇制否定に至る諷刺がある。それは、今に宮廷中をまっかにしてやるぞという戦闘的な姿勢があり、そして、それは、だれでもない、作者自身の声なのである。

この姿勢は、筒井敬介にも、岡本良雄にもはっきりと見られた。筒井の『コルプス先生』は、遠い北にいる少女から、数千の生命が危険に瀕していると手紙でうったえられれば、時をうつさずに北に行く。「金もうけ患者の余病は《世の中に害や毒をながしても、いっさいかまわぬ》という、病氣らしい。」といった言葉が、やや生硬で性急で表面的な諷刺であることは、まぎれもないことだが、とにかくコルプス先生は、行動し、世の中をよくしていったのである。岡本の『ディオゲネスの家』の父親は、ヤミでもうけた隣人を告発している。つまり、この時期の作品のほとんどには、自らの行動によって世の中は変わりうるという満々たる自信と気魄と一種のゆとりがこもっている。そこには、挫折感から屈折した次代への期待など、入りこむ余地はなかったのである。日本の児童文学史上、これは、まことにまれな、幸福な時期だったといえるかもしれない。

『コルプス先生汽車へのる』（一九四八）、『コルプス先生馬車へのる』（一九四九）や『ウィザード博士』は、波多野完治の命名で、当時無国籍童話とよばれたが、猪野省三が「戦後の児童文学は、まず自由なるメルヘンの開花から出発した。」（『日本児童文学』、一九四八）と指

摘したように、昭和二〇年から二五年頃までは、メルヘン主流の期間だったといえる。そして、そこに、私は第二の特徴を見る。多くの作家がメルヘンに向かったのは、結果はどうあれ、民主主義の理想を伝え、理想的な国や社会の像をえがこうとしたためであった。その意味では、ひじょうに高度な、硬質な文学の時代であったといえる。意識だけは、牧歌的な童話の世界や、善意の日常生活絵巻をあつかわず、ひじょうに雄大だったわけである。だから、作家たちは、後に論争をおこした「童話は自己表現か否か」などになやむことはなかった。変革の可能性を信じ、国全体の合言葉であった民主主義をメルヘンという形式で表現した。だから、ねこなで声にみちた現在の児童文学の状態から見ると大胆としか思えない仕事がいくつか見られる。

平塚武二は、『太陽よりも月よりも』で、権謀術数のかぎりをつくして、みなし子の境涯から大国の王に成り上がる人間をえがいてみせた。平塚は、昭和四四年の新版で、

「私がこの作品で試みようとしたことは、『善意の文学』といわれてきた童話の『善意』を、かなぐり棄てようということでした。いままでの童話作家は、『善意』をかくれ

蓑がわりにして、真実な自己表現をしてこなかったのではあるまいか？ “善意”は、あ

げ底ではなかっただろうか？ 童話作家の子どもへの呼びかけは、つくり声ではなかった
だろうか？ これが当時の私の反省でした。この反省から出発して、私は、童話作家が触
れたがらなかった人間の不徳、悪をとりあげました。人間の強欲、無慈悲、暴虐、虚偽、
愚昧などを、子どもたちの目の前に、はっきり描いて見せようと思いました。」（実業之日
本社、一七六ページ）

と、創作意図を回顧している。

子どもたちに、人間の実態をかくさず示し、それを通じて、真に正しい生き方を提示し
ようとしたわけである。おそらく、その背後には、軍国主義的侵略と悲惨な結末を阻止で
きなかった、自分をも含めた戦前の日本人の精神形成のプロセスへのにがい悔恨と批判が
あったにちがいない。その意味で、この作品には、逆説的ながら、人間の理想像が盛りこ
まれている。だが、さらに勘ぐれば、平塚武二には、善意な小心者より、大きな悪人にひ
かれるような心の傾きもあったのではないか。いろいろな点から、ここには、平塚武二が

そのまま正直に表現されている。子どものためではなく、まず自分のためにメルヘンという形式の文学をつくり、しかも、平明で凝縮度の高い文章で、骨太の物語が展開され、子どもによくわかる、子どもの文学になっている。

坪田譲治の『サバクの虹』（一九四八）ほど子どもの文学に不向きなテーマはない。広大な砂漠の上に雲が立ち、雨がふり、三日三晩虹がたつ。やがて砂漠は森に変わり、泉から水があふれ、さまざまな生物がくらすようになる。だが、時がたつと森はふたたび砂漠になり、もう一度虹がたつたまま、二度と森にもどらない。現在、読みかえしてみると、この作品には、輪廻を説くなどというだけではなく、虚無の深淵が大きく口をあけている。そんなテーマを「ある年のある夏のある日のことでした。このさびしい——そこはサバクだったのですが——山と野原の世界をかこんで、銀色にかがやく雲の峰がたちました。雲の峰はむくむくもりあがって、高い塔のように見えたり、大きな大入道のような形をしていたり、仏さまがはすの花の上にすわっているすがたになったりしていました。地上は、ものすごいさびしさなのに、空がこんなにうつくしかったので、もしこのサバクに人間が一